

米国の利上げトレンド継続に向けて物価は依然好調～米生産者・消費者物価指数

2018年9月10日(月)

今月の利上げはほぼ確定的も、12月の追加利上げやその後の利上げペースについての見通しについて見通しが分かれる中、その鍵を握っているのが米国の物価動向です。

ターゲット水準を超えて物価の上昇が続くと、利上げ基調は変わらず。ドル高の流れが継続へ。

直近のトレンドであるドル高新興国通貨安は、米国の利上げ基調を受けて、リスクを勘案した高金利新興国通貨投資より米国の方が望ましいという動きが基本にあることを考えると、米国の利上げ基調の継続はかなり重要なポイントとなります。

そうした中で、今週は12日に米生産者物価指数(PPI)、13日に米消費者物価指数(CPI)が発表されます。

米国のインフレターゲットの対象はPCE(個人消費支出)デフレーターで、日本や欧州のようにCPIではありませんが、PCEとCPIは水準こそ違え(PCEの方が代替品の扱いの違いなどで一般的に低く出ます)、強弱の傾向は似ますので、発表がかなり遅い(8月分は9月28日です)PCEよりもCPIが重要視されます。

また、PPIもCPIの先行指標としての意味に加え、米企業の収益状況に与える影響が注目されます(PPIが上がってCPIが上がっていないと、コスト高が小売価格に反映しきれていないということで警戒感が広がります)。

今回の予想を発表順にPPIから見てみましょう。

予想は前年比+3.2%、食品とエネルギーを除くコア前年比+2.7%となっています。前年に比べ総合は0.1ポイント鈍化、コアは前回と同じ伸びとなります。前月比の予想が+0.2%と前月の横ばいから強くなっている分、それほど心配はいりませんが、前年比は前々月の+3.4%から2か月連続での鈍化見込みということで少し気になるところ。卸売り・小売り業者のマージンの低下が指摘されています。

とはいえ、水準的には3%超えとかなり高めであり、すぐく気になるというほどではありません。

続いて翌日13日のCPIです。総合はPPIと同じく前年に比べて0.1ポイント鈍化しての2.8%が見込まれています。食品とエネルギーを除くコアは前月と同じ+2.4%の見込みです。

例えばガソリン小売価格(全米全種平均・EIA調査)をみると、7月が前年比で21.3%の上昇を見せたことに対して、8月は18.8%にとどまるなど、エネルギー価格の上昇傾向は変わらずとはいえ、7月に比べると総じて伸びが鈍化している傾向が見られることが、こうした状況を誘っているようです(なのでコアだと横ばい)。

もっとも伸びている状況に変わりはなく、とくに心配はなさそうです。

CPIが3%に乗せるようなインパクトのある数字が見込まれているわけではありませんが、基本的にはドル買い材料となりそうです

なお、CPIの発表される13日には、20時に英国とトルコが政策金利発表、20時45分にECBの政策金利発表が控えています。英、欧はともに据え置き。注目は声明内容で特に英国はブレグジット警戒のある中でどこまで前向き姿勢を維持できるかが注目に。トルコは大規模な利上げが期待されています。ただ、エルドアン大統領の圧力で上げきれないとの見通しもあります。この場合トルコリラ売りが、南アランドなどの他の新興国通貨売りにもつながりそうでその点は要注意です。